全力の人
── 吉田信介先生のご退職に際して ──

学部長・研究科長
竹　内　　理

敬愛する吉田信介先生が、この３月に関西大学をご退職になる。特別契約教授の任期も終えられ、すべてを満了されてのご退職ではあるが、私にとっては寂しさを感じる出来事である。先生とは、今から35年前、私が前任校の研究助手をしている頃にはじめてお会いして以来のお付きあいとなる。それからは、共著の著書や論文を出版させていただいたり、副学部長として学部運営を支えて頂いたり、さらには学会理事として、当時会長であった私をサポートして頂いたりと、様々な機会で助けて頂いた。私にとっては、困った時はなんでも吉田先生に頼れば良いという強い安心感のあった存在であっただけに、寂しさがひとしおである。

先生は愛知県のご出身（一族は奈良の高取とのこと）で、幼少期に大阪へ移られ、大阪教育大学附属池田高校から立命館大学法学部へ進学された。ご卒業の後は、ライオン事務器（株）の勤務を経て、米国カンザス大学へ留学。その後、プール学院短大、甲子園大学、武庫川女子大学、摂南大学、立命館大学を経て、関西大学・外国語教育研究機構に着任された。一旦企業に勤務されたが、学問の道を諦めきれず留学され、大学人としての道を歩まれたわけだ。上記のような様々なご経験が、のちに副学部長として外国語学部を運営された際に、大いに活かされたことは想像に難くない。

米国留学時代の先生は、現在の温厚なご様子からは想像のできない、とても「いかつい」お姿であった。かつてその時代のお写真を拝見したことがあるのだが、大いに驚かされた。（私の記憶が正しければ）チョッパータイプのハンドルを握りながらハーレーの大型バイクに跨がり、長めの髪をポニーテールに束ね、革ジャンをはおり、黒ブーツをはいて、ヒゲ面のお顔に黒のグラサンを着けて、ネバダ州ミード湖のフーバーダムのところでポーズをとっておられる写真であった。「もしその場に居あわせたとしたら、絶対に目を合わせたくないタイプの人ですね」と私が先生に申し上げたところ、「ほんとうにそうですね」と呵々大笑されたのを昨日のことのように覚えている。先生は、そのお姿で、アメリカ中を旅行して回られ、見聞を広められたと聞いている。このような現地体験重視の姿勢が、外国語学部随一の人気ゼミである吉田ゼミの様々な活動につながっていたのであろう。

吉田先生といえば、学部創設期の SA（スタディ・アブロード）プログラムの立役者であったことも忘れてはならないだろう。外国語学部設置決定から申請・開設まで、本当に短い時間しかなかったため、様々なことが同時進行で進んでいた。その中で、先生は、母校カンザス大学と、立命館勤務時代に関係のあったユタ大学、そしてサービス・ラーニングのご研究で知己がおられたフィリピンの国立ブラカン大学における SA プログラムを、ほんの数ヶ月で一気にまとめあげ、なんとか 4 月の開設に間に合わせるという離れ業を成し遂げられた。この功績は決して忘れ去られてはならないだろう。提携交渉には、私もご一緒させていただいたことがあったが、あの時の緊張感（交渉が不成立なら文科省への申請書に書いたことが実現できない！）と交渉成立後の満足感（なんとか乗り切った！）を共有させて頂いたのは、私にとって本当に僥倖であった。

特別契約教授になられた後も、1 回も欠かさず教授会にご出席になられ、様々な問い掛けをされていたお姿は、教授会メンバーの記憶に新しいと思う。時には体調のすぐれないこともあり、また時には様々な状況の中でお疲れのこともあったと聞いている。それでも欠かさず教授会へ参加され、様々なご意見を述べられていたのは、先生の責任感の顕れだと私は思う。「自分はなんとか逃げ切り定年を迎えました。でも若い人たちはこれから本当に大変ですね」というようなことは、口が裂けても言わない人なのだ。ゼミ学生の指導も絶対に手を抜かない。研究も手を抜かず、科研費もとり続ける。最後の最後まで全力で自分の責務を全うし、定年を迎えられたのだ。そんな先生に、心よりの感謝の言葉を述べて、ご退職の餞としたい。信介先生、長い間、本当にありがとうございました。先生のお気持ちは十分に受けとめました。あとのことは、きっと皆が何とかしてくれるはずです。ご心配なく。